

注(3) p. 36 の注(5)参照。

注(4) p. 36 の注(5)参照。

注(5) こくぶんたいら。儒者。名取郡岩沼給仕〔きっし〕組の家に生れた。諱は豊章、字は子達、通称平蔵、後に平と改め、松嶼また鶴村と号した。幼時から学を好み、苦学力行、佐藤一斎の塾にあること前後二十九年、一斎門下の十哲と称せられた。学成って伊達家儒員に挙げられ、養賢堂指南役となり、また郡奉行から小姓頭に進んだ。維新後知学局学頭に補せられた。廃藩後世事を離れ専ら子弟を教育した。明治7年教導職の中講義となった。「六代治家記録」・「楽山公〔第13代伊達慶邦〕治家記録」の編纂事業に参加。同12年宮城県会議員となる。又宮城中学校の招きに応じて経書を講義した、生徒3百皆その徳風に感化されたという。天保中凶荒に備えるため、甘藷の栽培を農民に勧めてその普及に努めた。戦前まで名取郡で甘藷栽培が盛んだったのは、彼の首唱によるといわれた。明治32年6月14日歿、享年96、仙台市通町東昌寺に葬る。

注(6) p. 170 の注(2)参照。

注(7) p. 17 の注(2)参照。

注(8) p. 71 の注(5)参照。

注(9) p. 314 の注(7)参照。

注(10) p. 71 の注(4)参照。

注(11) p. 314 の注(8)参照。

注(12) p. 314 の注(9)参照。

注(13) p. 65 の注(2)参照。

注(14) p. 313 の注(1)参照。

注(15) p. 170 の注(1)参照。

注(16) p. 314 の注(6)参照。

注(17) p. 60 の注(2)参照。

資料 伊達治家記録概要（和田清馬。「仙台郷土研究」第18巻第2号の内）

73. 三尺三五平について

問 三尺三五平について書かれたものに、どれどれあるか。

答 三尺三五平とは、元禄〔1688 - 1704〕頃の伊達家の軽卒だったと伝えられる人物です。その名

の通り3尺〔1m足らず〕の身長しかなかったが、居合の名人だったといわれています。仙台では本名本田左五平といいい見瑞寺(1)にその墓が残り、一方その生地と伝えられる志田郡松山や江刺郡岩谷堂やまた玉造郡岩出山などでは本名を田中三平(2)といっています。彼の実像は全く曖昧で、その特技や奇行の故に伝説的附加が多く、殊に、明治28年奥羽日々新聞に小説「三五平」（竹山人作）が連載されてから、そのフィクションによる虚像が更に膨らんでしまい、今日語られるような三尺三五平となってしまったといえます。

三尺三五平について書かれたものは数多く世に出ています、その主なるものを次に挙げておきます。

1. 「仙台人名大辞書」（菊田定郷）

『本田左五平』

武芸家。俗に三尺三五平とて奇代の武芸家なり、本名を本田左五平と云ひて仙台藩の軽卒なり、左五平に関する伝説は種々ありて一々信憑〔しんぴょう〕するに足らざれども、其の軀の短矮軽捷にして剣術居合等の武道に精練なりしことは想像に難からず、今に左五平の首切地蔵とて遺跡の存するもの名取郡中田村及び宮城郡利府村赤沼にあり、左五平の伝説として明治廿八年奥羽日々新聞に連載したる竹山人の小説「三五平」は毫も根拠なきものなり、（竹山人の談）従て左五平の年代をも詳にせず、本田家の菩提所は仙台東九番丁見瑞寺にあり、同寺に就て調査するに左五平と称するもの三人あり、△初代左五平は釈道休、元禄十一年六月五日△三代左五平は釈清寒、享保十四年十月十三日△七代左五平は釈宗岳、嘉永二年閏四月十三日四十八歳とあり、右の内所謂三五平は初代なるべきか、蓋し武芸の精熟なるを以て特に士分に取り立てられ、本田家の初代となりたるにはあらざるか、其伝説中に江戸勤番中、旗元等が華奢風流の装束を悪みて之を懲したりと云ふこと多ければ元禄頃の事ならんと思はるれど如何にや、猶後考を俟つべし。』

2. 「松山町史」（松山町編）

『剣法の名人「三尺三五平」』

左五平は松山茂庭氏の足軽の家に生れ本名を田中三平と称して新町に居宅があった。身長三尺三寸というチンチクリンで、いたって風采があがらないが非常に器用で、常に身長に似合わない大刀を腰にしていたが、刀の鑓（こじり）に自分で加工して車を取付けていたということである。また、まことに身軽な人で、生れつき身軽だけでなく、裏の畑に麻（一説には麦）を植えて朝夕それを跳び越えて練習し、剣道指南の小沢郷助に師事して、常に絶間なく修練を積み、特に据物斬と早斬にかけては非凡の達人となった。

天保十二年（一八四一）の或日のこと、武者修業者（一説に女性であったという）がやってきたが恐ろしく腕の立つ人であつたらしく、近隣各道場を荒しまわり、ついにわが領内にやって来た。いよいよ明日十代の領主升元の御前試合というので、小沢郷助が如何にして彼の邪剣を破ろうかと思案して居る所へ左吾平が訪ねて来て「先生、これしきの事に先生が最初からお出になつては、わ

が松山の活券〔こけん〕にかかわります。御心配御無用、拙者不敏ながら一案がございますからおまかせ下さい。」と言って後輩某をつれて武者修業者の宿を訪問した。一応のあいさつの後「さて先生、いよいよ明日は御前試合、つきましては当道場の掟でござるが、門下生の一人がお相手をいたして技を競い、それと同じ技がお出来にならなければ、小沢先生はお相手をいたしません。これは当道場の定めでござる。若し強いてやろうと仰有っても、当道場には小沢先生は申すに及ばず拙者以上の門下生が雲の如く居ります。失礼ながら到底お相手は難しかろうと存じます。今宵は小沢先生の命で末輩の拙者が推参いたした次第でございます。では御覧下さりませ。「いざ！」というわけで、つれて来た後輩の額に火灯したローソクをあてて鉢巻をさせ、己れは袴の股立高だかと袴、鉢巻キリりと締め、愛刀をギラリと引き抜いて「やっ」と裂帛〔れつぱく〕の気合もろとも切りおろせば、ローソクは見〔美〕事に縦二つに割れて火は消えず、しかも額にかすり傷一つつかない。餘りの見〔美〕事さに驚いた武者修業者は、その夜の中に早そうに荷物を取りまとめて、いづれへか立ち去って姿をくらましてしまったという。

左吾平はまた大の健脚者で、夕食後にブラリと仙台まで遊びに出かけ、真夜中までにはチャンと帰って来て寝ていたというようなことがしばしばあったというが、彼の豪胆さと情け深い一面を物語る話としてこんなのがある。ある満月の夜例の通り出かけたが、七北田の七曲りの山道にさしかかったとき、草むらのあたりでゴソゴソしているものがあるのでよく見ると一頭の狼、さすがの左吾平も一瞬ギョッとして身構えたが、とびかかって来る様子もなく、何か故ありげなので瞳を凝らしてこれを見れば、大きな口からタラタラと涎（よだれ）を流して、何か哀願でもするようなそぶりであった。大刀を鞘（さや）におさめて月の光で口の中を調べて見ると、何かの骨が顎（あご）に引っかかっているの、「よし取ってやるぞ、じっとしている。」と狼の鋭い歯の間に指を入れて取ってやり、「お前、欲が深いからこんな目にあうのだ、以後気をつけるがいいぞ。」と頭をなでてやると尾をふりながら体をすり寄せて感謝する態度を現わすのであった。それからいつもあの山道を通るときは、どこからかこの狼が姿をあらわし、いそいそと森の出口まで左吾平を送り迎えして呉れたとのことである。

又ある時、参勤交代で仙台藩が江戸詰中、領主升元左吾平をお伴に御微行で芝居見物に行かれた。前の席に居る者の頭が邪魔でよく見えないので升元は「すまないが頭を少しよけて呉れないか」というと「何？頭が邪魔だと？あざみの辰を知らねえのか。どこの田舎侍だか知らねえが、俺の縄張へ来て何のあいさつもないばかりか、頭が邪魔とは何事だ」と酒臭い息を吹かけて因縁つけて来た。左吾平が相手になって何とかなだめようとしているとますます威丈高になって、あたりかまわず大声で怒鳴り散らしては主升元に危害を加えようとするので、肚に据えかねた左吾平、例の大刀の柄に手をかけ、裂帛の気合するどく、スラリ鞘を走ったと思ったが斬った手は見えない。無論あざみの辰の首はおちない。唯あれほどやかましかったたんかがバツタリと聞えなくなったので、周囲の人びとが不思議に思っただけでふり返って見ると左吾平は何事もなかったように平気で舞台に眼をやって

いる。しばらくしてあざみの辰の首がポロリと落ち体がばたりと倒れた。そこで「それ人殺しだ」とさわぎになったが誰も現場を見た者がいないのでキメ手がない。そこでこの上は木戸口で一人びとり帰る人の佩刀をあらためて、血のついてる人を容疑者とするより外なかりとうことになった。いよいよ左吾平の番になって抜いて見せたが、手早くて目にとまらない。「もう一度抜いて見せて下さい。」と言われて、ちょっと抜いたような手つきをしたが抜いた手は見えない。そこで「もう一度ゆっくり抜いて見せて下さい。抜くまねだけしてちっとも抜かないじゃありませんか」といわれたので左吾平は声を荒らげて「抜くまねとは何事だ、汝等の眼は節穴か。」しかし、「大方そんな事を言うだろうと思ったから、二度目に抜いたときついでに証拠としてこの木戸柱を切っておいたからよう見ろ。武士の魂を汝等如きものの指図でそう何度も何度も抜かれるか」といったので、見るとなるほど直径五寸あまりもある丸柱が見〔美〕事にななめにきられている。あまり見〔美〕事な腕前に皆あっけにとられているうちに、升元左吾平主従の姿はもうどこかへ見えなくなっていたという。

しかしこのように向う所ほとんど敵なき彼にも、極めて愛嬌ある一つの失敗談があったのである。仙台の向山にはその頃も今と同様に、殊に花時にはずらりと軒を並べて団子屋が店を張っていた。その中に一軒味もよかったであろうが、作る事の速さにかけては市内評判のおやじがいた。甘党の左吾平は大いにその店をひいきにして、始終行っては食べていたが、或る日この亭主左吾平に風変りな他流試合を申込んだ。左吾平が例の大刀を抜いて収める間に亭主は刀の刃にアンコをつける。若しつけそこなったら今後一切団子代は貰わないというかけであった。「ワッハッハ……面白いな。団子屋と剣術屋の試合ではあまり見世物にもなるまいが、幸い外に見る人もないからよかろう。」と見るまに電光石火、パチリと鞘に収まる。亭主の構えたアンコ籠も一閃目にもとまらぬすどさで鍋に納まる。どちらも自信満々です。

「どうだおやじ、アンコがついたか。」「へい、つけたつもりですがどうか抜いてお調べ下さい。」そこで左吾平念の為抜いて見ると、コレは意外、刀身の中頃から切先までベッタリと塗られていた。「やおおやじ、コレハコレハ左吾平今日は見〔美〕事に一本参ったぞ、いや大したものだ。」と笑いながら懐紙を出して刀を拭って立去ったという。

このほかに彼の逸話武勇談は数多く残っている。中年後伊達家直参に懇望され、青葉城下に邸宅を賜って高禄を受けるようになってからも、旧主茂庭家と恩師小沢先生を忘れず終生音信を怠らなかつたと伝えられている。左吾平は岩手〔出〕山にも伝説がある。岩手〔出〕山においては、三尺左吾平は本名田中三平といった。松山町の生れで後に仙台藩の御足輕になった。いろいろな奇談がある。

左吾平が三人いる。

初代 元禄十一年（一六九八）死亡

三代 享保十四年（一七二九）死亡

七代 嘉永二年（一八四九）死亡

岩手〔出〕山で奇談は寛文年間のことであるから、初代左吾平の話であろう。と岩手〔出〕山町史下巻に見える。しかし松山における伝説に出てくる年代は天保十二年（一八四一）人物は松山十代の邑主升元および剣道指南役小沢郷助から推して七代左吾平の事蹟ではなからうか。』

3. 「わたしたちの松山町」（松山町教育委員会編）

『剣法の名人（三尺三吾平）物語

左吾平は、松山茂庭氏の足軽の家に生れ、本名を田中三平とって、非常に器用で常に身長に似合わない太刀を腰にしていました。〔上掲「2. 松山町史」によった記述なので下略〕

4. 「武道」（小原 伸。「宮城県史」18の内）

『仙台には、三尺三五平と呼ばれた居合術名人の話が残っている。本名は本田左五平といい仙台藩の軽卒であつたらしい。伝説はいろいろあつて一々信用することはできないが、頗る武芸に熟達していたことは想像される。三五平の首切地蔵といわれるものが仙台市中田と宮城郡利府村〔現利府町〕赤沼との二箇所にある。また本田家の善堤所仙台市東九番丁見瑞寺の墓には左五平という者が三人ある。武芸に達していたため特に士分に取立てられて同家の祖となつたと思われるので、初代が本人であろう。その歿年は元禄十一年六月五日である。短軀軽捷の故に異名をつけられたが体に倍する六尺余の大刀を操り、帯びる時は地に曳くので鑓に車をつけたと伝えられる。』

5. 「岩出山町史」下巻（岩出山町編）

『山崎弥五郎と三尺左吾平の試合

寛文年間（今から約三〇〇年前）に岩出山城下に山崎弥五郎という浪人が住んでいた。やせた長身の浪人だった。幼少より剣術が好きで器用なたちだった。長じてメキメキ腕が上がり、居合抜きの名人として城下の評判となった。ところがこの弥五郎存外の臆病者で、夜道を歩きたがらぬ弱虫だった。……

寛文年間、仙台藩の家臣に三尺左吾平という侍がいた。背が非常に低く、三尺くらいしかなかったところから、その名があつたといわれている。そのくせ刀だけは長いものが好きで、身の丈ほどのものを持ち歩いたという伝説である。この侍、外を歩くときは鑓（こじり）に車をつけて引きずって歩いたというから見ものだったろう。ところでこの左吾平が藩切つての劍の使手だということからおどろく。この小男が、身の丈ほどの長刀をどうさばいたものか、不思議みたいなことである。

その頃、仙台藩から岩出山へ巡検が廻つて来た。年貢を査定するの他に、お日陰屋敷への巡検であつた。その巡検が仙台の事件を運んで来てはおいてゆき、帰りには岩出山のはなしをみやげに持ちかへした侍のはなしなどがよく伝えられた。仙台藩の左吾平のはなしが岩出山へ伝えられ、そのお返しに山崎弥五郎のはなしが持ってゆかれた。

「それなら二人に試合させてみたらどうだ」という、ひやかし半分の気持が、あたりの連中をさわがせ、話が持ち上つた。巡検を通して、本藩と岩出山との間に再三交渉がもたれ、ひやかし気分で

さわぎたてた話が、具体化し本物になってしまった。

時は寛文の末、秋十月十日、場所は浦小路、方法がふるっている。秋だから大根のためし切りにしてはどうかという相談がまとまり、さてはと畑の多い浦小路にきまった。大根は一本切り、三本・五本・七本・十本切り、これは三本・五本とたばねたものを居合抜きで切る。二人の前に立てておいて同時に切る。十本束まで終わった後がおもしろい。一間おきにジグザグに一本・二本・三本と十本まで束ねたものを立てておく。横に五間はなして二列にならべ、開始の合図で二人が同時に走って行き、一本から十本まで走りながら切る試合である。これは時間と本数が計算され、優劣が判定される試合で、当日この試合を見にと集まった藩士や地方人が、やんやと拍手を送って見物したという。どちらがどれだけ切り、何分かかり、どっちが勝ち、どちらが負けたかという記録は残念ながら残っていない。ただ想像できることは、ノッポの弥五郎と、チビの左吾平が、しかも身の丈ほどの長刀をふりまわして活躍した有様である。

注1. 三尺左吾平は本名田中三平といった。松山町の生れで、後には仙台藩の御足軽になった。色々な奇談がある。

注2. 左吾平が三人ある。

初代 元禄十一年(一六九八)死亡

三代 享保十四年(一七二九)死亡

七代 嘉永二年(一八四九)死亡

注3. 山崎弥五郎との話は寛文年間のことであるから、初代左吾平との話であろう。』

6. 「仙台郷土史夜話」(三原良吉)

『三尺左五平の話』

(目にもとまらぬ居合抜)

むかし、仙台に三尺左五平という居合抜(いあいぬき)の達人があった。身の丈(たけ)三尺自分の体(からだ)よりも長い刀のゴジりに車をつけ、高足駄(たかあしだ)をはいて、からからと刀の車の音をさせながら歩いたという。その居合抜は目にもとまらず、ただパチンというツバの音がするだけであった。曲がったことが大きらいで悪い奴(やつ)をこらしめて歩いた。むかし肴町には相撲や芝居が仙台へきた時の定宿(じょうやど)があった。ある時、左五平が肴町を通ると後からきた相撲とりが、自分の腰よりも低い左五平の頭の上に手をやって、ゲラゲラ笑ってからかった。左五平が気づいて後ろをふり返った時、パチンという音をさせて大手をふって歩いて行く。相撲とりも鼻歌をうたいながら国分町に出て芭蕉の辻まで行った時、大きな体が頭のとっぺんからたてにパッキリ二つに割れて倒れた。

(芝居ハネてから首もげる)

江戸勤番中、芝居見物に行ったところ後ろに江戸で悪名高いごろつきが多勢の乾分(こぶん)をつれてきて酒を飲みながら、見物の迷惑もそっちのけでさわいでいたが、時々煙管(きせる)の灰

を左五平の頭に落とすので「これこれ町人、静かにせぬか」と注意したら「何をいいやがる。この小びとの三びんめ、てめえの頭ア灰吹きにおあつれえ向きだ」と怒鳴った時、例のパチンという音がした。ごろつきの親分は、それきりだまりこんでそれでも舞台の方を見ていたっけが、芝居がハネると、トタンにコロリと首がもげた。芝居小屋は大さわぎになった。下手人(げしゅにん)は刀をさしている人にちがいないというので、町役人もきて木戸口で刀改めが始まった。左五平は二度は抜かんからよく見てくれとってパチンと音をさせた。改め役が「音だけじゃだめだ。も一べん抜いてくれ」というと左五平は「武士に二言はない。抜いた証拠をつけておいたから、よく見ろ」とってサッサと行ってしまった。木戸の柱に、ななめに切りつけたあざやかな痕(あと)があった。

(左五平一世一代の負け)

左五平は向山の愛宕さんに月参りをして、見張らしのよい茶見世で好物の団子を食うのが楽しみだった。ある日この団子屋のおやじから試合を申し込まれた。刀を抜いた時、ヘラでアンコをくっつけるか、くっつけぬかで勝負を決める。もしもおやじが負けたら向後団子をなんぼ食っても銭はもらわないといった。左五平ニッコリ笑って「よし、さあこい」と立ち上がると、おやじタスキがけでアンコベラをを青眼(せいがん)にかまえる。左五平のエイッという気合とパチン、刀をぬいて改めたらツバ元にアンコがこってりついていて左五平みごとに負けた。これが一世一代の負けであった。

左五平は江戸まで七泊八日の道法(みちのり)を三日で歩いたという。また左五平に切りつけられた石の化け地蔵というのが仙台の中田や利府の赤沼にあり、柴田郡川崎の竜雲寺にもある。さてこの豪傑、一体どこの生まれかという古川だともいうし、志田郡松山の茂庭の家来ともいい、また江刺郡岩谷堂伊達家の家来だったともいって、みな同じような話を伝えている。仙台では東九番丁の見瑞寺に左五平といい伝える墓がある。姓は本田、名は左五平で、歴代の中に同名の人が三人あり、初代は釈道休で元禄十一年(一六九八)、二代は釈清寒で享保十四年(一七二九)十月十三日、七代は釈宗岩で嘉永二年(一八四九)壬四月十三日、この三人の左五平のうちどれが本人かわからないが年代からいえば初代でもあろうか。だがこの話は全国に広く分布する民話の一つの型で、地方により名前がちがうだけである。ただ、むかし、仙台の子供ならだれでも喜んで聞いたなつかしい話である。』

7. 「伝説」(三原良吉。「宮城県史」21の内)

『袈裟掛地蔵

柴田・川崎町竜雲寺門前の笹谷街道に、夜になると、大入道が出て人をおびやかす。三尺左五平がこれを聞いて待ちかまえ、現われた大入道を袈裟掛けに切る。あくる日見ると、石地蔵が見事に切られていた。』

なお、戦前に、この三尺三五平を主人公に、エノケン主演で映画化されたことがあります。これに

ついでに資料に次のものがあります。

1. 「宮城県百科事典」(河北新報社編)

『三尺左吾平』

昭和19年(1944)製作の東宝映画。三尺左吾平と呼ばれる仙台藩の足軽を主人公に、寛文事件(伊達騒動)を側面から描いた喜劇で、青木助三郎の原作を石田民三監督、榎本健一の主演で映画化した。仙台の現地ロケで、戦災前の仙台城周辺などが背景に写されている点で貴重なフィルムである。戦後、米軍に没収されたが、後に返還され、昭和51(1976)かつての関係者が新しいプリントを製作、県図書館に寄贈した。』

2. 「仙台映画大全集」(集団MISSA)

『三尺左吾平 昭和19年・東宝作品』

エノケン主演の喜劇。仙台藩の足軽である本田左吾平は、小男のうえに顔かたちも怪異、しかも誰にも親まれる風貌。常に身丈に余る大刀を帯びて城下を闊歩し、軽輩ながら居合術の達人。直情型で情にもろい左吾平は、奇行が多く、藩中の話題の中心人物。

無茶で 気がようて 親孝行で

丈は三尺 刀は五尺

花のお江戸へ 三日で駆けて

あとの三日で また帰る。

と歌われ、人呼んで「三尺左吾平」。藩中、時に幼君亀千代をめぐる隠謀が起り、一徹な彼は叛徒のはかりごとによって逆臣に祭り上げられるが、謀反を悟った左吾平は、幼君を守って獅子奮迅。お家は安泰、花の青葉城へお国入り、という筋。

エノケンを主人公にするには恰好な材料で、この原案は、仙台市の青木ホテル経営者であった青木助三郎氏であった。脚本は三村伸太郎、演出は石田民三。先の「磯川兵助功名噺」とは、黒川弥太郎、清川荘司など同様に共演しており、姉妹篇ともいえる作品で、高峰秀子も共演していた。仙台藩士ということで、仙台に長期一ヶ月にわたって、市内の古風を残す各所の建物が選ばれてロケ撮影が行なわれた。その場所は、青葉城大手門、瑞鳳殿、南小泉の伊達家下屋敷、伊沢平勝邸、佐々重商店の味噌蔵、八幡町や古城の古民家などであった。大手門は当時第二師団司令部の正門であったため、その許可を憲兵隊に願い出なければならず、大変な手数を要したという。なお、大手門のシーンで門番役のエキストラには、当時仙台東宝劇場支配人であった青木精一氏もその一人であった。』

注(1) 片膝をついたまま、素早く刀を抜いて敵を斬り倒す剣技。元亀・天正の頃林崎重信にはじまるといふ。近世には、長い刀を気合いとともに抜く技をもいうようになった。

注(2) 仙台市東九番丁にあり、真宗大谷派で、天正年中〔1573 - 91〕乗西和尚が一寺を宮城郡松森に創建したのに始まる。慶安2年〔1649〕城東柴田町に地を賜わって移った。この時、

本山から寺号を与えられた。寛文13年〔1673。改元延宝元年〕現在地に移り今日に至る。

資料 仙台人名大辞書（菊田定郷）

松山町史（松山町編）

わたしたちの松山町（松山町教育委員会編）

武道（小原 伸。「宮城県史」18の内）

岩出山町史下巻（岩出山町編）

仙台郷土史夜話（三原良吉）

伝説（三原良吉。「宮城県史」21の内）

宮城県百科事典（河北新報社編）

仙台映画大全集（集団MISSA）

74. 昔の仙台市動物園に虎がいたか

問 昔の動物園とは、広瀬川河川整備事業として、昭和9年に造成を終った評定河原埋立地の一部、8千146坪を敷地として、仙台市が昭和11年4月1日新設開園したもののことです。動物は、丁度タイミングよく東京浅草公園花屋敷から35種100点に及ぶ主要動物を一括譲受け購入することができました。3月中に搬入された、これら動物中に、⁽²⁾ 印度産の虎が1頭含まれていたのです。⁽³⁾ 「仙台市交通事業五十年史」（仙台市交通局編）に「花屋敷からの購入動物調」として、そのことが明記されています。また「仙台市史」第2巻にも、虎を含む動物名が記されています。「昭和11年宮城県仙台市事務報告書並財産表」には、昭和11年12月末現在の収容動物数が記載されていますが、この方は動物学的分類による綱・目別に種数・点数の数字が示されているだけになっています。⁽⁴⁾

なお、この動物園は、仙台市電気水道事業部電車事業所の主管で管理運営され、東京以北唯一の動物園として、地元はもとより他県からも多大の期待をもって歓迎されたものでした。開園の年の入園者は31万人を数える盛況でしたが、やがて戦時体勢に入るにつれ、来観者は漸減の一途を辿ることになってしまいました。昭和19年には戦局がいよいよ急迫を告げ、空襲の危険も予想される状況となったため、猛獣類の非常処分を余儀なくされ、3月下旬虎・ライオンなど11点が射殺されたのでした。時節柄来園者も寂れ、自然休業状態に入っていたところ、翌20年7月10日の仙台空襲で被災焼失、動物園はそのまま廃止となったのでした。

注(1) 琵琶首の東側で広瀬川に沿ったところに、寛永13年〔1636〕評定所〔もと裁許所といった〕が設置されてから、この川岸を評定川原と称した。

注(2) 東京都台東区浅草公園にあった「浅草花屋敷」。嘉永3年〔1850〕頃植木職森田六三郎の